弘道館記

弘道とは何ぞ。人能（よ）く道を弘むるなり。道とは何ぞ。天地の大經にして、生民（せいみん）の須臾（しゅゆ）も離るべからざるものなり。弘道の館は、何の爲に設くるや。恭（うやうや）しく惟（おもん）みるに、上古、神聖、極を立て統を垂れたまひ、天地位（くらい）し、萬物育（いく）す。其の六合（りくごう）に照臨し、㝢内（うだい）を統御したまふ所以（ゆえん）のもの、未（いま）だ嘗て斯（こ）の道に由らずんばあらざるなり。寶祚（ほうそ）、之（これ）を以て窮（きわまり）無く、國體、之を以て尊嚴、蒼生（そうせい）、之を以て安寧、蠻夷戎狄（ばんいじゅうてき）、之を以て率服（そっぷく）す。而（しこ）うして聖子神孫、尚ほ肯（あ）へて自（みずか）ら足れりとせず、人に取りて以て善を爲すを樂しみたまふ。乃（すなわ）ち、西土（せいど）唐虞（とうぐ）三代（さんだい）の治敎（ちきょう）の若（ごと）き、資（と）りて以て皇猷（こうゆう）を賛（たす）けたまふ。是（ここ）に於て、斯の道兪（いよいよ）大いに、兪明らかにして、復た尚（くわ）ふるなし。中世以降、異端邪説、民を誣（し）ひ世を惑（まど）はし、俗儒曲學、此（これ）を舎（す）てて彼（かれ）に從ひ、皇化陵夷（りょうい）し、禍亂相踵（あいつ）ぎ、大道（だいどう）の世に明らかならざるや、蓋（けだ）し亦久し。我が東照宮、撥亂反正（はつらんはんせい）、尊王攘夷、允（まこと）に武、允に文、以て太平の基（もとい）を開く。吾が祖威公（いこう）、實に封（ほう）を東土に受け、夙（つと）に日本武尊の爲人（ひととなり）を慕ひ、神道を尊び、武備を繕（おさ）む。義公、繼述（けいじゅつ）し、嘗て感を夷齊（いせい）に發し、更に儒敎を崇（とうと）び、明倫正名（めいりんせいめい）、以て國家に藩屏（はんぺい）たり。爾來（じらい）百數十年、世（よよ）遺緒（いしょ）を承（う）け、恩澤に沐浴（もくよく）し、以て今日に至る。則ち苟（いやし）くも臣子たる者、豈（あ）に斯の道を推弘し、先德を發揚する所以を思はざるべけんや。此れ則ち館の、爲（ため）に設けらるる所以なり。抑（そもそ）も夫（か）の建御雷神（たけみかずちのかみ）を祀（まつ）るものは何ぞ。其の天功を草昧（そうまい）に亮（たす）け、威靈を茲（この土）に留むるを以て、其の始を原（たず）ね、其の本に報い、民をして斯の道の繇（よ）つて來（きた）る所を知らしめんと欲するなり。其の孔子廟を營むものは何ぞ。唐虞三代の道、此（ここ）に折衷するを以て、其の德を欽（うやま）ひ、其の敎を資（と）り、人をして斯の道の益（ますま）す大いに且つ明らかなる所以の偶然ならざるを知らしめんと欲するなり。嗚嘑（ああ）、我が國中（こくちゅう）の士民、夙夜（しゅくや）解（おこた）らず、斯の館に出入（しゅつにゅう）し、神州の道を奉じ、西土（せいど）の敎を資（と）り、忠孝二无（な）く、文武岐（わか）れず、學問事業其の效を殊（こと）にせず、神を敬ひ儒を崇（とうと）び、偏黨あるなく、衆思を集め群力を宣（の）べ、以て國家無窮の恩に報いなば、則ち豈に徒（ただ）に祖宗の志、墜（お）ちざるのみならんや、神皇（しんこう）在天の靈も亦た將（まさ）に降鑒（こうかん）したまはんとす。斯の館を設けて以て其の治敎（ちきょう）を統（す）ぶる者は誰（たれ）ぞ。權中納言從三位（じゅさんみ）源朝臣（みなもとのあそん）齊昭なり。